

〔釈文〕

安政二年乙卯十月二日夜亥ノ刻過より大地震ニて出火遠方江しらせのため

■是色印ハ出火場所ノ●是色印崩れそんじ▲地震小ゆり度々今に／しづまり不申候
(右 上)

頃ハ十月二日の夜の事なりしが本丁辺に有徳の商人ありしが／家内上下とも睦間敷其身ハ常々
観音を信じ夜毎ニ浅草ノ寺江参詣いたしけるが今夜も早く参詣いたさんと思ひけるが／宵の口
はからず用向あつて亥の刻頃に参詣いたし観世音江礼拝／し有がたさのあまり思はずまどろミ
しが夢ともなくうつゝともなく／忽然と白髪はくはつの貴僧きそう老人あらはれ 曰く汝常々神慮ニ叶ひ
仏ノ意にそむかず故に今異変有といへども汝此なんをさけ得さすべし／悲哉濁世の人間此難
のぐるゝもの稀なり見よく今にと曰ふ／うちに 忽天地震動し轟く音すさまじく既に此御
堂もゆり／崩かと思ひケレバ彼もの御僧の袂にすがり三衣の袖のすきまより／四方のあり
さまを見渡すに我が手のひらを見るがごとし目前に市ノ中五六丁通りハ将棋倒しにことごとく
震崩せば是がために押に打れ／即死或ハ半死半生のもの幾万人の其数しれずかくするうち諸ノ
方の崩れし家々烟たち火もへ出忽出火となり△新吉原不残土手下ノ五十けん馬道通りさる若町
不残聖天町山の宿不残東橋通り迄凡五十丁ノ程焼失浅草観音寺内本願寺御堂無事駒形堂辺より
黒船丁迄南側ノ不残夫より下谷御成海道中程より上長者町広小路迄東側不残池のはた／かや丁
より根津迄不残湯しま天神下御家敷小石川ニてハりうケいばし／近辺御屋敷方町家とも焼すべ
て此辺大あれ深川六ヶん堀川西二丁ほどノ夫より熊井戸より一の鳥居迄不残いせ崎町冬木丁京
はしかじ町一丁ノ目一丁目五郎兵へ町量町北紺屋町壱二丁目大根岸竹町南伝馬町二三丁ノ目具
足町柳町鈴木丁いなバ丁松川丁本材木町七八丁目八丁掘水谷丁辺ノより鉄砲洲辺焼築地御堂残
り芝にてハしばい丁焼其外所々焼失場所数多ノ有之といへともあけで数得る二いとまあらず△
凡火口三十八ヶ所ニ及是が為に苦しむ有／さまも斯やと計りあはれ二も又恐しともいはん方
なし其余家居大半ゆがミ或ハ／菱ニなり土蔵杯ハことごとく土瓦ゆり落し鳥籠のことく二成も
あり或ハ崩ノ古今めづらしき大変前代未聞といひつべしかく有所に已前御僧のノ曰く汝今こと
帰すべし此上ハ猶々仁義五常を守り家業大切ニ信心怠べからず汝が／家居ハ家内一統無事成
べしと曰ひけるあら有がたや南無観音是全御仏の妙助ノなりあら尊や南無阿弥陀仏ノと唱ふ
る声にニ忽夢ハ覚ニけり／時ニ安政二年卯十月二日夜亥ノ刻より大地震ニ出火ハ四日申ノ刻ニ
火鎮り申候

(右 下)

御屋鋪方あらまし小川町辺松平駿河守様松平豊前守様榊原式部様堀田備中守様ノ内藤駿河守様
戸田竹治郎様伊藤若狭守様御火消家敷其外御はた本方百軒上ノ西御丸下会津様松平下総様内藤
紀伊守様松平玄蕃様御本丸下酒井雅楽頭ノ様森川出羽守様大名小路因州様遠藤但馬守様本多中
務様永遠江守ノ様林大学頭様八代河岸御火消屋敷迄外桜田大毛利様大鍋様朽木近江守様ノ小笠
原佐渡守様大南部様有馬備後守様亀井様伊藤様柳沢様薩州様御ノ装束屋敷此外大名屋敷数多有
之といへどもあげてかそへがたし

右此度之異変相済候へバ向ふ両国廻向院ニおいて地震大火に付召死人くやうの為大せがき死人
凡老万五千三百余人と云